

松竹さんになってから 楽屋の菅丞相〈摘録〉

初代 吉田栄三／話

鴻池幸武／編

〈出典：『吉田栄三自伝』和敬書店、昭和23年5月〉

翌三年の正月は『三代記』と『^{ねびきのかどまつ}壽門松』と『^{どまた}吃又』でしたが、やはり、正月というに大入一つ出ず^{しま}終いでした。

二月は、『菅原』の通しに、切が『廿四孝』の「御殿」で、新加入の伊達（後の土佐）さんの語り物で、絃は猿治郎（後の仙糸）さんで、私は八重垣姫でしたが、「思はず一間を走り出で——」の処の、猿治郎さんの間がとでもよく、私は、よい気持で十分にお姫様が遣えました。この外の役は菅丞相と千代とで、この二役は、交る交る殆んど続けざまに出るので、大変忙しく、その上、丞相様は、舞台以外の楽屋での用事が多く、部屋では荒菰を敷いてお^{まつ}祀りをするのが昔からの例で、殊に、私は初役でしたから、栄之助をつれて、道明寺の天満宮へお詣り致しました。ここで丞相様の人形のお話をちょっと申しますと、先ず、「伝授場」を済まし、「^{つせせつかん}杖折檻」の間に、楽屋風呂へ入ります。で、これは必ず^{あらゆ}新湯でなければいけないのです。それから「^{とってんこう}東天紅」の間に、衣裳を着て、祀ってある丞相様の人形にお燈明を上げ、お供物を供え、お祈りをして、丁度、「丞相名残」となります。それが切れると、又、元のようにお祀りをして千代を遣って居ると、「^{ちやせんざけ}茶筌酒」に用事があり、引込んでから、「切腹」の間に、「^{てっばいざん}天拝山」の丞相様の人形の用意をして、「天拝山」が切れると、直ぐ、「狂い」で脱いだ肩を、元通り着せます。これは、必ず直ぐやらないといけない事になって居て、用事があるから後廻しという訳に行きません。すると、「寺子屋」の「首実検」が済んで、千代の出になるという順序で、ほんとうに御飯を頂く間もありません。

ところで、この芝居中、ある日、御霊神社裏の塵捨場に、荒木造りの天神様の御神体が捨ててあったと、大道具の兵吉という者が見附け、私の部屋で一緒にお祀りしたらと持って来て呉れましたので、一緒に拜んで居ましたら、或日の事、「天拝山」の「狂い」で、二度目の下手から飛んで出て、まん中の山へ登りしな（「天拝山」では、色々な型があつて、宙吊りや早替りをするのもありますが、私は演りません）天井の上の吊し縄が切れて、道具が落ちて来ました。が、又丁度その日に限って、私が、^{きま}極り迄の足数を誤って三足程多く踏んだ日で、怪我もせずに済みましたが、何時もの足数なれば、丁度私の頭の上へ、道具が落ちる所で、大怪我は免れぬところ、全く右の荒木の御神体の御加護と思って居ります。この御神体は、暫くの間、私の家にお祀りしてありましたが、後に、別の事で易を見て貰った時、易者に御神体を見せましたら、マスクを掛けて眺め、「これは中々あらたかなもので、私宅に祀って、却って勿体ない事でもあると、禍するさかい、^{おやしろ}御社へ納めなはれ」との事でしたので、早速、天満の天神様へお湯を上げて納めました。

（後略）